

50周年記念・リレー縦走～第4行程

5つのピークを越えて 新越～針ノ木縦走

2016年7月23日～24日 仙波 美代子



労山入会初参加の山行は、数年来の夢だった新越から針ノ木への縦走である。歩き通せる自信はなかったけれど、一人ではないからナントカなるかと能天気構えていた。それでも少々不安を抱えて歩き始めて間もなく、そんな私の気持ちをふっと軽くする出来事があった。山には必携の水と食料。そのおにぎりを車に忘れた人がいた。生憎と登山口の駐車場は満杯で、扇沢まで戻らなければならない。早々にお疲れさま。

リーダーのゆっくりペースが、私の最近のペースとほぼ同じで、息の上がらない歩き方ができそうで一安心である。種池山荘まで濃い霧の中、風もなく景色も見えず、したたる汗を拭いつつ歩く。ライチョウ日和だと期待をしていたが、ガスが濃すぎて、居ても分からなかったかもしれない。お昼の種池山荘では、生ビールの誘惑が待っていた。蛮勇のある誰かさんがついにゲット。まだ先があるからとグッと我慢していた我々も一口ずつお相伴に預かり罪悪感を共有する。そんな折、山荘のスピーカーから「財布の忘れ物があります」との声。「あ、私かもしれない。ない？」トイレでチップを入れて忘れてきたのだ。急いで受付へと走る。届けてくれたのは、関東からの若い女性。山とて何もお礼できず、次回北アに来られたら是非に連絡をと私の連絡先をお渡しした。おにぎりより忘れ物の度合いは大きい。

岩小屋沢への道は、土曜日というのにたまにしか行き会う登山者がおらず、花も多くなって快適に進んだ。新越山荘も予想外に空いていて、夕食前には、罪悪感なしのビールで楽しい団らんのひと時を持った。

2日目は見事に晴れ上がり、立山連峰を従えた剣岳の威容に歓声を上げながら進む。崩れて細くなった鞍部は注意して歩き、ピークが近づくと岩場を這うように登る。これが面白い。鳴沢、赤沢と一つずつ攻略して標柱に抱きついては一休み。さすがにスバリあたりで疲れが出てきたけれど、あと少しの思いで黙々と足を運ぶ。最後の針ノ木へ着いたときは心底ほっとした。ゆっくり歩いてくれた皆様に感謝。

針ノ木からの下りで、諦めていたライチョウの親子に出会い、嬉しかった。

岩稜帯に、いまは濃い緑に輝くウラシマツツジ。さぞかし秋の燃えるような紅葉は見事だろうと再訪の思いを秘かに温めた。

ニューフェイスさん登場 仙波美代子さん自己紹介

愛媛県松山市出身 1943年(S18) 生まれ

青春時代の30年近くを大阪で過ごす。大町市在住。

★趣味 ①登山～里山からヒマラヤまで～は偶然ながら労山と同じ。

②旅～国内外を問わず、ひとりでほっつき歩くのが好き。

③土いじり～野菜はまだ苗代の方が高くつく。

④読み書き～ソロバンはメチャ苦手。

⑤手仕事～足ふみエコミシンで洋服のリフォームなど。

★性格はよくも悪くも楽道家。若いころのまじめ、責任感は歳とともにほどほどに緩み、好奇心と行動力は衰えを知らず。加齢による忘却の危険性大。

★唯一自慢できることは、「風邪はひかない」という自己宣言で50年近く風邪をひいていないこと。

山への想い

10年ほど前から始めた登山。

私の登山の目的は、しんどい思いをして頂きを目指し、山ふところに抱かれること。道中の可憐な花や思いがけぬ絶景はおまけ。(山小屋での飲み会の楽しみの比重もかなり大きい) とはいえ、歳と共に体力の衰えには抗えず、そのことを自覚しつつ、縁あってお仲間に入れていただいた皆様と楽しい山めぐりをしていきたいと思っております。どうかよろしくお願いします。

感動の稜線日記

MIHO

はるか眼下の黒部湖を遊覧船ガルベが移動している。
2年前 黒部湖の遊覧船ガルベから「あたしでもいつか行けるかなあ」って
憧れて見上げていた稜線。今自分がそこに立ち歩いている感動。
透き通った空気 広がる大パノラマ くっきりと続く細尾根の登山道。
憧れの2000メートルをトラバースしていることが 嬉しくて嬉しくて
心の中は スキップして駆け出したいほど ワクワクしていた。
心の中で ず〜っと歌を口ずさんで歩いていた。
目前にすくとそびえる スバリ、針ノ木。
下界では決してお目にかかれない美男子。
爽やか かつ神聖で圧倒的な存在感。
足元から続く あの急な登山道をこれから自分が歩いて あの頂に立つのかと
心がときめいた。 一歩一歩呼吸を整えながら足を運んだ。

夢が一つ叶った。

振り返った銀色の急な絶壁。

斜面にぎっしりと咲くコマクサがキラキラと美しく 眩しかった。



黒部湖を進むガルベ

南アルプス荒川三山・赤石岳

7月14日～17日

報告者：じゅんちゃ 同行者：谷さん、佐久 パネさん、森さん

7月14日、佐久のみなさんと合流するために安曇野ICより長坂ICに向かう。待ち合せの病院で車に荷物を移動し長坂ICより中部縦貫道の最終、増穂で降り、新東名新清水ICで乗る。新静岡で降り、ひたすら山道を畑薙ダム駐車場に向かう。早朝テントを撤収し特殊東海フォレストのマイクロバスに乗るため駐車場に移動。バスは7時過ぎに榎島に向け出発。

8時24分、やっと榎島に到着。舗装道路でないのでなかなかの揺れ。8時47分千枚小屋に向け出発。尾根をひたすら登り、千枚小屋には3時14分到着。小屋の手前で多少雨に降られたが傘でしのご程度。県営千枚小屋はなかなかきれいで、登山者も定員以下であったのでゆっくり休むことができた。

15日早朝、天気も上々で富士山が雲の上に頭を出し眺望できる。千枚岳を經由し荒川岳

(悪沢岳)に向かう。7時40分荒川岳に到着。赤石岳・聖岳・塩見岳等眺望抜群。一旦下り中岳避難小屋に8時54分到着。ここからまた下り当初宿泊予定であった荒川小屋に10時27分到着。天気も最高でまだ早いので食事をしてから予定を変更し赤石岳避難小屋に向かう。1時39分赤石岳頂上に到着。最高地点にある一等三角点にタッチした後、すぐ下にある赤石岳避難小屋に向かう。

県営の避難小屋であるが、一般の山小屋とあまりかわらない設備の行き届いたきれいな小屋であった。小屋上には眺望のよい場所があり、そこにはテーブルが設置されており、ビールを飲みながら360度の眺望を楽しむ。管理人さんは気さくなかで色々説明をしていただいたり小屋の中では自ら撮影した写真の説明をしてくれた。奥さんはハーモニカを吹いてくれ、翌日出発の時も吹いてくれた。

17日、5時16分小屋を出発。赤石小屋7時39分到着。榎島10時33分到着。バスが行ってしまったので白旗史朗写真館等で時間をつぶし、2時に畑薙駐車場に戻る。



第9回例会(8月2日)から

第9回例会(8月2日)は災害警報が発令される中、谷口・桑原・鈴木・森田の4名のみ出席に留まり、用意したミニ講習相も不発に終わりました。

1. 7月19日(8th例会)以降の山行・行事实績

- ① 7月23日(土)～24日(日) リレー縦走第4行程：
柏原新道－種池小屋－新越小屋－針ノ木岳－雪溪下り
谷口 津田 宮島 鶴川栄子 神津 仙波
- ② 7月23日(土)～24日(日) 県連スキルアップ講習会 横田 鈴木 +15名
山岳総合センター・他
- ③ 7月23日(土) 白馬鑓ヶ岳温泉県～偵察・トレーニング 森田+1
- ④ 7月25日(月)～26日(火) 中央アルプス、越百山以南～播古木山：勝野+3
- ⑤ 7月30日(土)～31日(日) 燕～常念岳：鈴木 +8
- ⑥ 7月31日(日) 白馬大雪溪－頂上山荘テン場 偵察・トレーニング 森田
- ⑦ 8月1日(月)～8月6日(土)
裏銀・爺－新越－船窪－烏帽子－三俣山荘－殺生小屋－沢渡：勝野 +3
- ⑧ 8月1日(月) 第2回 50周年を語る会：
谷口 小林 小山 古畑(夫妻) 井川 北條 森田

2. 今後の日程について

第8回例会以降の山行・行事と今後の山行・行事は以下の通りです。

- 8月6日～7日に予定していたリレー縦走第3行程の『爺・鹿島槍・五竜岳縦走』は参加できない方が増えたので、8月27日～29日に延期します。
- 夏山合宿は8月19日～21日実施。16日の例会でミーティングをします。
- 8月24日(水)には第3回、50周年語る会を行います。前回は8名の参加で盛り上がりました。次回も古くからの会員の皆さんはじめ、多数の会員のご出席を要請します。
- 9月9日～11日に、リレー縦走第5行程。船窪～烏帽子
- 9月23日～25日にリレー縦走第6行程、湯俣から三俣～双六岳の予定。
合宿を含め、これらが成功すればかなり繋がることとなります。

3. 計画書・登山届け提出に関して

計画書の提出先は、谷口・小山・鈴木宛になっていますが、それぞれが不在の場合もあるので、できるだけ3人全員宛に送って下さい。(FAXの場合、谷口・小山さんへ)

また、現在、留守本部体制をとっていないので、PCで送る場合、一方的に送

信するのではなく、先に電話または携帯メールで了承を得てからPCメール添付で送信して下さい。

なお、計画書の作成やリーダーは誰でもできるように、研鑽しましょう

4. 山行関係交通費について

これまでの議論途中です。とくにB県連講習会関係交通費およびC会山行への補助等について意見を求めます。

山行関係交通費等の基準及び会補助案

第2次案

		参加費	車両費	高速代	宿泊代
A	県連三役担当者会議・総会等(理事会を除く)	***	¥30円×往復実数	往復実費	実費
B	県連登山学校・各種講習会関係	3000円まで	¥10円×往復実数 (最大300まで)	片道分	実費
C	会山行・県連等の交流山行	***	¥30円×往復実数	往復実費	実費

個人負担であるが、会から一定額の補助(そのつど協議)

※県連理事会関係は、基本的に県連から支給されるので、¥30円×往復実数計算で不足分を会から補填する

基本的考え方

- ①会議関係(A)への出席は、会を代表して出席する「出張」であり、会から全額実費支出する
- ②「登山学校」等(B)は、会員自らの技術向上と同時に、会に還元するという趣旨から一定の補助とする
- ③山行(C)は、会員が楽しむための考え方で原則として自己負担とするが、一定額を会から補助する。(金額は場所等によって、会計と会長で協議する)
- ④各種山行のカウント基点は、最初の合流(集合)場所とする。
- ⑤全国連盟等の会議・交流会・講習会は、別途協議する。
- ⑥ABCにない場合、近い項目を適用する。
- ⑦会の財政状況を見て、会計担当と会長で適宜検討する。
- ⑧個人山行は、参加者で協議する。

論点①Bに補助するかどうか、補助するとすれば適正金額はどの程度か。「一定額」とは。

論点②Cの¥30円は妥当か

論点③会山行への適正な補助額は、どの程度か。(例：165×30円÷4人=12375円の場合、375円補助など)

子ども達と登った30余年 最後のアルプス冒険学校

これまではアルプス冒険学校と称して、梅池登山口を起点に白馬大池に上がり、そこをベースに幕営して、翌日白馬岳登頂を試みるというパターン+αとして、途中の山ノ神湿原を探訪するという活動を行ってきた。

このパターンは、『山のあしおと小学校』と言う、スタッフが自分だけの弱小組織が、アルプスという大自然を舞台に展開することができる唯一のスタイルで、広島時代の山仲間の援助を得ながら、過去に何度か試みて来たものである。小・中学生が主対象であるが、子ども達の保護者や断糖生活と言う特殊な生活を送っている参加者もいる。



空身で大池から白馬岳まで往復するというスタイルは、経験が少なく体力のない子ども達にとっては、困難を伴いながらも程よい行程である点や、天候の急変等の場合に山荘に逃げ込むことができる点などを考慮してのことであるが、一面では物足りなさや、同じ道を帰らなければならないと言う無駄感がつきまとう。

それを一歩進めて、荷物を背負って登頂・縦走し、白馬で幕営できればその達成感は何倍にも3倍にもなる。何とか縦走できないものか～と言う思いを常に抱えても来た。

とは言えスタッフのいない小さな会にとってはそのハードルは高く、一方、実行するために自分に残された時間はどんどん削られて行く～スタッフが欲しい。

そう思って早くから森のくらしの里の若い人達に声をかけて見たが、夏はみな忙しく、ボランティアで『2泊3日の応援を!!』とはとても言えない。

それでも諦められず、僅かな可能性に賭けて、梅池～三山縦走～鍾温泉というコースを想定した計画をつくってみた。

そのメンバーに、昨年の大池～白馬岳往復のTubasa(中2男)と、春休み瀬戸の旅で準スタッフと言えるほど頼もしい働きをするTomoki(高2男)を始めから加え、これに少数の初心者も募ることにした。

何人かの申し込みがあり、計画を詰めていく段階になると不安と重圧は募る一方で、『やっぱり無謀だ』と言う気持ちが拭えず、従来のパターンに戻したいと言

う気持ちとの闘いあいに悶々とする日々が続いた。

どう考えてみても梅池からの三山縦走はあり得ないと断念し、大雪溪からの下山と言う案で計画を進めて行く中で、初めて大雪溪からの三山縦走というアイデアが浮上した。そんな折に、新潟の山仲間、M氏の参加が得られることになり、百万の援軍を得ることとなった。

そのM氏との協議の中から、トレーニングを兼ねた白馬鍾温泉への偵察山行が実現し、一番気がかりだった温泉上部の鎖の岩場を視察することができた。これによって重くのしかかっていた重圧が少しとれ、気持ちが幾分楽になった。

『梅池-大池-三山縦走-鍾温泉』と言うコースは、広島時代の仲間達とは何回か試みたことがある。蓮華温泉から五輪尾根～白馬水平道～三山・鍾温泉経由と言うルートを10名余りの子どもを伴って歩いたこともあった。

4名もの強力なスタッフでさして苦にもせず実施していたのだが、実を言うと鍾温泉上部のこの鎖場の記憶があまりない。それはテキトーだったと言う訳では決してなく、スタッフ陣に自信があって普通程度の慎重度でクリアーしていたのである。若気の勢いと言うか、奢りがあったのも確かだ。

今はスタッフも若気の奢りもなくなって怖さだけが増幅しているのだが、それでも子ども達と一緒にアルプスを歩く楽しさ・喜びは捨てられないでいる。

不安要素は行動することによってしか取り除けないという教訓を得た勢いで、翌週はもう一つの懸念～大雪溪コースの経験不足～を払拭すべく、大雪溪～頂上山荘のトレーニング・偵察を行った。

30回以上の白馬岳山行の殆どは梅池からの登りで、大雪溪からの登りは30年以上前に1～2度しかなく、また数度しかない下り経験も最後の5月の下山からすでに10年以上が経過している。つまり大雪溪のことは何も知らないに等しかったので、この偵察山行は絶対に必要なものだった。

にも拘らず当初その用意はなかった。白馬岳偵察の日も当日のぎりぎりまで決断しかねていて、誰に強制された訳でもないが、言わば『しぶしぶ』ながらの決行であった。鍾温泉もしかりである。振り返ってみると、それがいかに無謀なことだったか・・・、背筋が凍る思いがする。

とまれ、強力な援軍とこの2つの偵察山行によって道が切り開かれたことは疑いなく、かくして本番を迎えたその段階で激震が走った。頼みの綱のM氏が参加できなくなったのである。

すでに矢は放たれており、責任感の塊のようなM氏は無理偏を二乗三乗して大雪溪の取りつきまで同行し、アイゼン装着から歩き方の指導までして、小さな足にアイゼンが大きすぎる子を気かけながら見送ってくれたのである。

こうして最後の冒険学校が始まった。

木偶